

[プリマリア]

Primaria

新時代の医療をともにデザインする

Vol. 13 | August 2015

今、注目の人聞く—発行人対談—

泉 並木

武蔵野赤十字病院副院長 / 消化器科部長

誰も教えてくれなかった診断推論

Occam's razor vs.
Hickam's dictum

臨床研究の道標 総合診療編

看護師による食事摂取量の
観察をとり入れた研究

Visionary People

—新たな価値をつくり出す人々—

川島 篤志

市立福知山市民病院
研究研修センター長 / 総合内科医長



Primaria

Vol. 13 August 2015

CONTENTS

26	24	20	18	14	12	6
日本初の「世界医学サミット(WHS)」を京都で開催	第9回 「自治の街」須賀川の住民と病院がともに手をたずさえて乗り越えた危機 公立岩瀬病院院長 三浦純一	今、注目の人に聞く——発行人対談—— 加速度を下げない肝炎治療の最前線。 武蔵野赤十字病院副院長／消化器科部長 泉並木	第2回 看護師による食事摂取量の観察をとり入れた研究 From ACP (米国内科学会) Japan Chapter	第13回 Occam's razor vs. Hickam's dictum 臨床研究の道標 総合診療編 第2回 看護師による食事摂取量の観察をとり入れた研究	誰も教えてくれなかった 診断推論	Visionary People—新たな価値をつくり出す人々— 教育機能を持つ 地域基幹病院から 地域医療を支える。 市立福知山市民病院研修センター長／総合内科医長 川島篤志

新しい価値と仕組み 理念

新しい価値やシステム、理念は、抽象的な「お題目」としてよりも、目に見え、手で触れられる、具体的なモデルの発する言葉を通じてこそ、理解が容易になります。

このコーナーは、本誌の価値や理念を知っていただく、もっとも「プライマリ」な場所です。

どうぞ、じっくりとお読みください。

学び

新時代の医師に求められる「腕」は、単なる検査や治療のテクニックではありません。患者の言葉に耳を傾け、患者を視て・聴いて・触るなどの行為を通じて、鍵となる情報を得、患者の抱えている問題を読み解く「推論力」を意味します。

確かな「推論力」と「コミュニケーション力」を身につけることにより、患者の信頼を得られます。

学び

良医の本質は、絶えることのない向上心と探究心にあります。研究は、研究自体のためにあるのではなく、診療を変え、患者のアウトカムを変えるためにあります。研究の本質を理解し、自分で実施するには研究の「お作法」を学ぶ必要があります。

基本的臨床力とともに、研究のリテラシーは新時代の良医に求められる必須要件です。

プライマリ

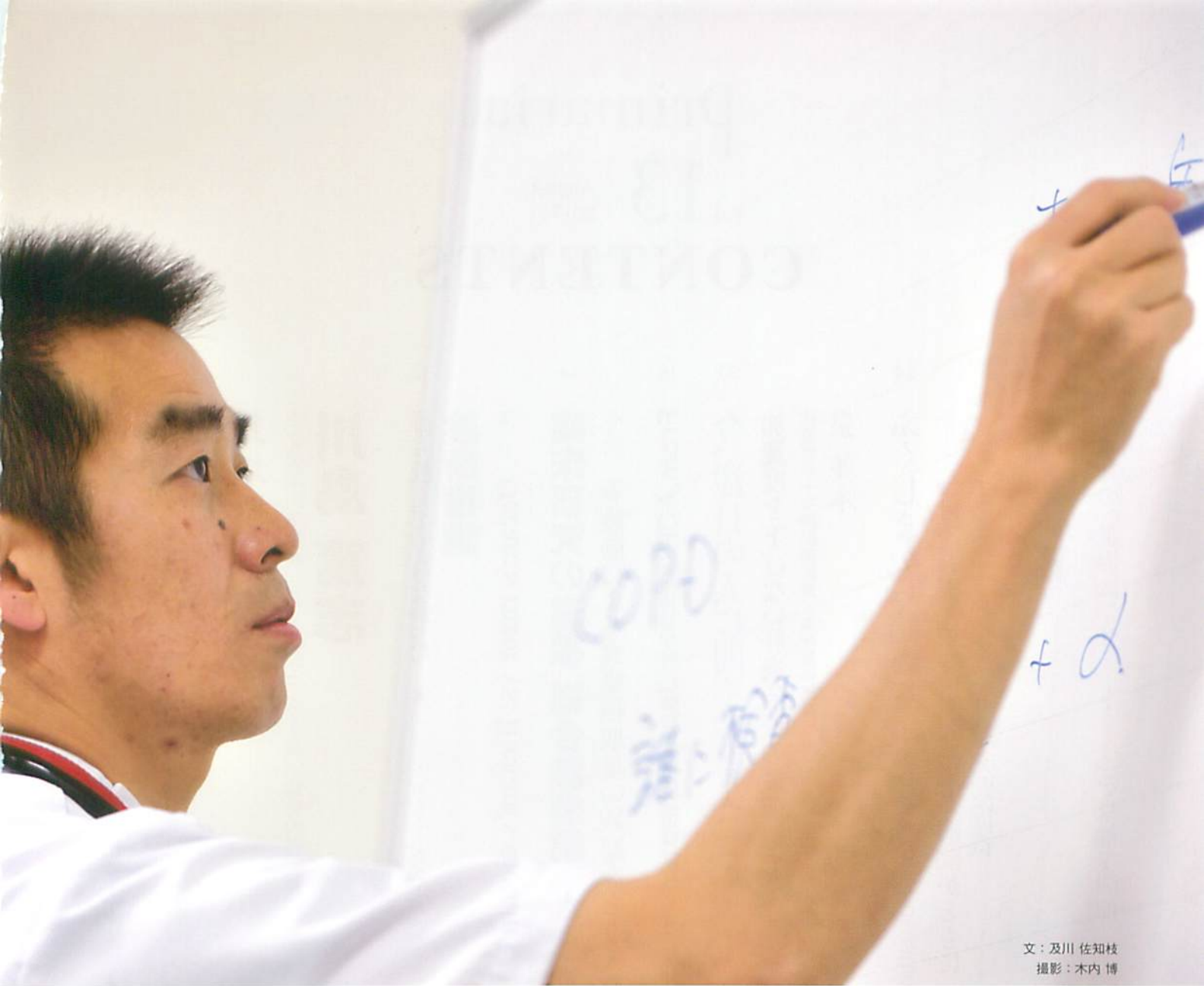
患者を臓器別に細分化せず、ひとりの人間として、さらに後ろに家族や社会を背負っている人間としてジェネラルに捉え、ケアするプライマリ・ケア、総合診療の重要性が見直されました。

ACP (米国内科学会) 日本支部では、内科を再び統合的に見直し、良き内科医を育むための学びと交流の場を、広く提供しています。

良医

今の「ふくしま」には日本の問題が凝縮しています。医師不足、高齢化、住民の健康や環境への不安……。東日本大震災後もふくしまの地に踏みとどまり、ふくしまの健康と医療を守っている名もなき良医たちにスポットをあて、何を始めようとしているのかをレポートします。

そこから読者の皆様の気づきやアクションが始まればと期待します。



文：及川 佐知枝
撮影：木内 博

教育機能を持つ 地域基幹病院から 地域医療を支える。

市立福知山市民病院研究研修センター長／総合内科医長

川島 篤志

Visionary **P**eople
新たな価値をつくり出す人々 Atsushi Kawashima

【プロローグ】

北海道の病院実習の体験を経て進路を変える

スポーツ刈りがよく似合っている少年のような風貌のせいか、はたまた「我が子たちに絶対的に愛されている自信がある」と言い切るイマドキのイクメン風発言のためか、足首にウエイトを巻いて院内の階段を一段置きで駆け上がる鍛え方のおかげか――。

今年42歳の実年齢よりも、はるかに若く見える、市立福知山市民病院（以下、福知山市民病院）研究研修センター長／総合内科医長の川島篤志氏。地方病院の総合診療科に招かれては、若い医師たちのモチベーションを上げる指導医として、全国の医学生や研修医たちの間で注目を集めている人物である。しかし過去の彼に、今の自分をどこまで想像できただろう。

「父が外科の開業医でした。格別の志があったわけではなく、なんとなく自分も医師になって、いずれは跡を継ぐのだろうと漠然と思いつきながら育ちました」

医学生るときは、先輩の「外科は内科もわかる」との言葉に従って外科を志望した。方向性がほぼ決まっていたせいか、勉強はそれほど、部活のサッカーとアルバイトに明け暮れ、病院見学にもほとんど行かなかったと言う。

転機は、学部6年目の学外実習で訪れた。「とにかく遠くに行ってみよう」と北海道へ。そして、空知郡栗沢町（現・岩見沢市栗沢町）の美流渡診療所で楢戸健次郎氏の診療を目の当たりにし、患者

をトータルに診る姿に心が激しく揺さぶられた。楢戸氏は、1960年代後半のアメリカにおける家庭医療研修プログラムに倣って研鑽を積んだ後、美流渡診療所を立ち上げた医師である。川島氏の中で「外科は内科もわかる」との神話が崩れ去り、家庭医になることが開業医に必要な技能を修得するための必須条件になった。

自分なりの「家庭医になる目標のもとに」

時代は1990年代後半、ちょうどプライマリ・ケアにスポットライトがあたり始めた時期である。家庭医療、総合診療との言葉も知られ出し、基幹病院では総合診療科が設けられ始めた。川島氏は自分なりの「家庭医になる」との目標のもと、筑波大学卒業と同時に関西に戻り、京都大学医学部附属病院へ赴任した。1年間のスローローテーションを行った後、市立舞鶴市民病院（以下、舞鶴市民病院）に移る。

同院は、総合診療科の医師養成で有名だったが、彼は「少ない情報しか知らず、昔から舞鶴市民病院に憧れていたわけではありません。存在を知ってから、幸運にも紛れ込めた感じです」と笑う。2001年からは、アメリカに自費留学して公衆衛生修士課程に籍を置く。帰国すると、ちょうど指導医のポジションに就くような年齢になっていた。市立堺病院の総合内科に勤務して以来、家庭医になるべく自己鍛錬をする一方で、その育成で頭角を現すようになる。

Profile

かわしま・あつし

- 1997年 筑波大学医学専門学群卒業
京都大学医学部附属病院内科研修（総合診療部所属）
- 1998年 市立舞鶴市民病院内科・救急研修
- 2002年 Johns Hopkins University School of Public Health
公衆衛生修士課程修了（MPH取得）
同年より市立堺病院総合内科にて臨床研修などにも従事
- 2008年 市立福知山市民病院総合内科
- 2013年 市立福知山市民病院研究研修センター長兼任
- 2015年 大江分院との連携による日本プライマリ・ケア連合学会認定後期研修プログラム（ver.2.0）のプログラム責任者

都市部で診療所を運営していた外科医の父の影響で医学部へ進学。「外科は内科もわかる」との先輩医師たちの言葉もあり、整形外科や外科系で研鑽を積み、将来は父の診療所を継ぐことを意識していた。だが、筑波大学での学外実習で北海道の美流渡診療所を見学し、進路の考えに変化が起こる。以降、家庭医をめざすとともに、その育成に積極的に取り組む。今や、医学生や若い研修医から大きな支持を受ける存在だ。

■福知山市民病院に川島氏を訪ね、恒例の総合内科の勉強会を見学させてもらった。レジデントにかまえる姿勢はない。自由で物おしせずに発言できるディスカッションの場だ。

私が当院に来て、声がけをして始めた勉強会です。月曜から金曜まで週5日、昼休みの時間を使って勉強会を行っています。今年度、私が担当している木曜日に関して言えば、研修医のリクエストのテーマにはほぼ即興で、集まった研修医たちと自由な会話を展開するというかたちですね。

■指導医が事前にテーマを明らかにし、入念に準備する。研修医もテーマについて予習しておくといったカンファレンスが一般的だが。

率直に言って教えるほうも教えられるほうも準備なしですから楽です。業務に差し障るような負担がなく、あとはいかに「面白い・ためになる」と思ってもらえるか。そうでないと長つづきはしません。

指導医は、万一その場で答えられないこと、知らないことが出てきたら、あとから勉強すればいい。答えられなかったとしても恥じる必要はありません。教えるほうが勉強すべき課題を見つけられる場でもあるのですから。

また集まった顔ぶれを見まわして「あ、彼はしゃべれそうだな」と思ったら、指名

して私の代わりに解説してもらおうケースもあります。不十分なのは当たり前ですから私が補足・訂正します。要は人の前に出て発表することに意味がある。知識はインプットするだけでは駄目、特に専攻医にとっては体得した知識をわかりやすくアウトプットするトレーニングが大事です。

■教育というと、とかく文字どおり「教える」といった一方通行の関係になりがちだ。

しかし、医療界でよく使われる「屋根瓦方式」のように、本質は「教える」と「教えられる」が一体化した双方向性が、高い教育的効果を生む。

研修が3年目、4年目になり、「ああ、それは勉強した」、「もう知っている」といった事項が増え、勉強会はいらないと感じるようになったら要注意。むしろ、そこが大切だと自覚してほしいです。

人の話を聞いて、「ウンウン」とうなずくのは簡単。でも、先ほども申し上げましたが、人前で発表してみれば、必ず自分の不十分さに気づく。教えることで、また学べるわけです。

■今の家庭医・総合診療医としての基本、あるいは勉強会の開催方法などは、ほとんどが舞鶴市民病院で培われたものだ。

舞鶴市民病院で、総合内科や救急の臨床

経験を積みながら、臨床研修や生涯教育に積極的にかかわりました。家庭医にとって重要な能力である、病歴聴取、身体診察、鑑別診断を主体とした臨床推論の研鑽も積み重ねられました。また、昼間に集まってひとつの症例を検討し、同じメンバーで食事を取りながら勉強のつづきを行う文化にも触れた、かけがえない3年間でした。

そこで、卒業6年目から勤めた市立堺病院でも勉強会の文化をつくりたいと、ランチの時間を使って勉強会を始めたのです。最初のころは、とにかく人が集まらなかつた。何をするのかわからないのですから当然です。けれども、とにかくひとり、2人だけでもつづけていたら、見学の学生も増え、その学生が研修医になり……と、最終的には舞鶴市民病院で行われていたような自主的で自由な勉強会ができました。私が異動したあとも、基本的に同じスタイルでつづいているようです。

福知山市民病院に着任時にもごく自然に同じような勉強会をスタートさせました。舞鶴市民病院では症例カンファレンスが基本でしたが、当院では自由度の幅を広げ、DVDなどの映像を流して皆で観るだけでもいい、もちろん専攻医やスタッフクラスが資料をつくるなどの準備をして発表するのもいい、といったフリースタイルの勉強会にしています。年度によって変わってもいい、面白くなければやめればいい。福岡県の麻生飯塚病院でも同様のコンセプトで行われているとご教授いただきました。

■また、卒後10年足らずで入職した市立堺病院時代に、勉強会から自然発生的に屋根瓦方式ができ上がっていく過程を経験し、それが研修医を集めるのに大きな役割を果たすと実感した。

市立堺病院では、院長・部長をはじめ先輩の先生方が、私ごときの若手の意見をよく聞いて、新たな教育方法の導入など、必

要な「決裁」をしてくださったので思ったことを円滑に実現できました。

私が着任前の研修医募集では、6名の募集に対して10名の見学者、そこから受験したのが8名、合格者が6名で、最終的に当院を選んでくれたのは3名だった。しかし翌年からマッチングシステムがスタートした効果と、「市立堺病院は教育に熱心」との口コミが広がったのでしよう、8名の募

集に対し60名以上の応募者がきました。以降、応募者は約60〜80名で推移していきま

す。医学生たちの情報収集の素早さと学びに対する欲求の高さの証だと感じます。

■市立堺病院でも福知山市民病院でも「教育に熱心」との評判を得るために必要だったのは、教育が文化になるまでつづけることだった。



オリエンテーションにはじまり、テーマを掲げて行う定期的な勉強会、初期研修・総合診療においては大切な分野である救急も含めて、症例をチェックする振り返りのカンファレンスなどを、市立堺病院でも福知山市市民病院でも行っています。

もうお気づきかもしれませんが、私にとって教育に関してのキーワードは、「文化を創る」です。そのためにも大切なのは継続。研修医や専攻医は、通常業務の忙しさがあって、学ぶことへの熱意は常に一定ではなく波があります。当然、カンファレンスへの参加人数も増えたり減ったり。ですから、参加人数などに左右されず、教育、「教える・教えられる」が文化になるまで、とにかくつづけることが必要なのです。

■さて、いよいよ話は佳境である。福知山市市民病院に赴任したのは、妻の妊娠を契機にキャリアデザインを再考する一方で、病院総合医として、教育機能を持つ地域基幹病院から地域医療を支える、ことを生涯の目標としたからだ話す。

子どもができたとき、自分も育児に参加したいと思いました。そうした希望を実現できる環境を求めて異動を考えたいわけです。一方で、自分の医師としての使命も考えました。答えは、すぐに出ました。「地域医療を支える」です。

■地域医療は、へき地や無医村の医療だけ

を指すのではない。川島氏は、地域医療を崩壊させないために何をすべきかの回答のひとつにたどりついた。

父の診療所を継いで開業医となり、地域を守ろうと思っていたのですが、いくつかの土地の基幹病院の医師として働き、教育にもたずさわるうちに、開業医となる以外にも地域医療を支える道があるのではないかと発想するようになりました。

そもそも「地域医療」とは何か。たいてい想像されるのが、医師が往診かばんを抱えて患者宅を訪問するような、いわゆる診療所の医師が展開するのが「地域」の医療でしょう。しかし、「地域医療」は都市にも地方にもあり、それぞれ異なる問題を抱えているのではないか。

たとえば「地域医療崩壊」です。同じ「地域医療」と言っても、今度はずいぶん違う光景を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。地方都市の中核病院を舞台にした病棟閉鎖や次々と救急の受け入れを断られる場面。ここで想像する光景に出てくるのは、診療所の医師ではなく病院、それも地域の基幹病院に焦点が変わっています。

ことほどさように、「地域医療」という言葉は漠然としていますし、実際に定義はいろいろあります。ただ、話を前に進めるために、ここでは「ある地域の中で病院や診療所、そこで働く医師やメディカルスタッフといった医療資源が、効率的に連続性を持って無駄なく使われるように、なら

かの連携をとって行う医療」と定義してみよう。

そうすると、はっきりと見えてきます。地域医療、特に地方都市の場合の地域医療を支えるには何がもつともポイントか。基幹病院がきちんと機能することです。診療所の医師たちが患者さんを送る先がなければ彼らの正しい診断も適切な治療も、すべてのがんばりが意味をなさなくなる。そこで妻の実家にほどよく近かった基幹病院であり、地域に根ざした医療を実践し、「教育力のない病院に未来はない」という理念を持たれる院長に惹かれて福知山で生涯、病院総合医を継続する決心をしました。

■川島氏の着任によって、福知山市市民病院は明らかに変わった。今まで振り向かれなかった病院に、いつの間にか研修を見学する医学生・若手医師からの問い合わせがくるようになった。研修医が増えれば医師の負担が軽くなり、病院は正しく機能できるようになる。教育機能を持つ地域基幹病院から地域医療を支える、彼の目標は達成されつつあるのか。

勤務して丸6年が経過していますが、総合内科、初期研修医を含めて、当院の医師数は30名以上増え、地方都市でのマグネットホスピタルになったと自負しています。当院を、臨床研究の発信を含め、地方都市での臨床研修、総合内科のロールモデルとすべく奮闘していくつもりです。

【エピソード】——20年後の日本の医療

不足？疲弊？さらなる不足の負のスパイラルから脱するには

うまくまわり出したように見える、福知山市民病院の機能だが、予断は許さないだろう。そうした中で、継続的に医師を確保するために必要なものは何か。

「良い環境でしょう。それは研修医や若い専攻医にとっては、まず教育に尽きる。そしてスタッフドクターにとっては、立地と興味とワーク・ライフ・バランスの3つです」

中堅、スタッフクラスの医師にとっての「興味」と言えば、臨床の幅と深さ、学会発表や臨床研究、そして執筆、病院の労働環境の改善といったプラス・アルファの部分だ。

「知識獲得の満足も、ワーク・ライフ・バランスを整えるにも、そしてもちろん若い人を魅きつける教育を行うにも、余裕がなければ実現できません」

仲間がいて協力し合って生まれる余裕。つまりは、十分なマンパワーだ。いつの間にか話は堂々めぐりに陥ってしまった。

発信しつづけることが、良い循環を生み出す

地方の基幹病院がマンパワーを得て、良い循環、正のスパイラルをつくり出すには、「発信しつづけること」が必要だと川島氏は言う。病院のホームページやブログ、メーリングリストといったインターネット上で、彼は情報を更新し、新たな情報を発信する。勤務している医師にもその家族にも励みになる。可能であれば、勉強会や研究会に出席して、つながりを増やす。依頼があれば遠方に講演にも向かうが、「院内で信頼される医師」、そして「家庭に信頼される父親」であることも重要視していて、断りを入れるケースも少なくないそうだ。また、院外から講師を招いての交流も（その講師が発信元になってくれるので）発信へとつながるので大事にする。

外部の医学生や研修医、専攻医、中堅クラスのスタッフドクターたちに向けて、とにかく発信しつづける。

「今年の内科学会でも研修医が2つ賞をもらいました。英文学会誌にも複数掲載されました。そんな一つひとつが、皆の喜びであり励みにもなる。「福知山で良い教育を受けられるかも」、「何か面白いことができそうだ」と感じてくれる人をひとりでも増やしたい」

福知山市民病院で学ぶ研修医たちが、働く医師たちが、どういう日常を送り、何に満足感や達成感を得ているのか。同院の魅力を発信しつづけることで、新しいつながりを見つけ、それが人材確保の足がかりとなると繰り返す。

「教名が当院の見学に来てくれたとして、そのうちのひとりでも研修に来たり常勤医になってくれれば、彼にはこの病院を支えつつ、実体験として当院の良さを理解してもらえらるわけです。」

そういう医師たちが長くこの病院や地域を支えてくれればうれしいうし、数年後に他院に移っても、その先で発信者となってくれるのだとしたら、それもいいと思います」

20年後、地方都市の基幹病院が福知山市民病院をモデルにして、マンパワー獲得に乗り出しているのだけは確かかなようだ。



- 「教育に熱心」との評判を得るためには、教育（教える・教えられる）が文化になるまで、ひたすらつづけること
- 知識はインプットするだけでは駄目、特に専攻医にとっては体得した知識をわかりやすくアウトプットするトレーニングが大事
- マンパワー獲得のポイント。病院のホームページやブログ、メーリングリストといったインターネット上で、外部に向け発信しつづける。可能な限り、さまざまな会に出席する